



旧約講解(29)アモス書【正義をいつも水の流れる川のように】

聖書本文:アモス書 5章21-24節/暗唱聖句:マタイの福音書5章16節

説教者: 鄭南哲牧師

我々は続いて旧約聖書の御言葉を学んで来ています。今日はその29回目でアモス書を通して一緒に学んで行きたいと思います。アモス(意味: 重荷を背負う)は紀元前7世紀に活動した神の預言者でした。アモスはエルサレムから南の方に16km離れたテコアというところの牧者のひとり(1:1)でした。アモスは預言者ホセアと同じ時代に活動していた預言者であり、ホセアが尽きない神の愛を宣布したならば、アモス預言者は神の義と正義を民に宣布した神の預言者でした。アモスは社会改革者ではありませんでしたが、ただ不義を行うイスラエルの民たちに神の怒りを伝えた者であります。それではアモス書をもっと正しく理解するためにアモス預言者が活動していた時代の歴史的な状況をまず知る必要があります。

<アモス書の歴史的な状況>

アモスが活動した時期には、南ユダの王国の王ウジヤが、北イスラエルはヤロブアム2世の王が治めていた時でした。この時代はダビデとソロモンの時代に負けないほど平和と繁栄の時代でした。しかし、当時強国であったアラムという国が随時(ずいじ)北イスラエルのサマリアに上って来て攻撃し、よく苦しめたのですが、アラムの王ベン・ハダデ3世の時にアッシリア滅亡されてしまいます。そのためこれ以上北イスラエルを脅かす周りの者はなくなったので、さらに北イスラエルは平和の時代を迎え、領土をさらに拡張することが出来ました(第二列王記14:28)。北イスラエルに戦争の脅威がなくなると、経済的にも盛んで繁栄されます。このような状況になると、我々はこれがすべて祝福されているかのように思われるかも知れませんが、果たして当時北イスラエルの人々に祝福になったのでしょうか。

しかし北イスラエルの経済的繁栄は貧富(ひんぷ)の差が激しくなり、豊かな人がいれば、貧しいものが多くなりました。権力を持つ人がいれば、権力から疎外された階層(かいそう)が現れます。このような状況の中で、社会の正義が崩され、社会の悪が現れまじめます。その事例がアモス書2章 6節以下に記録されています。

“主はこう仰せられる。「イスラエルの犯した三つのそむきの罪、四つのそむきの罪のために、わたしはその刑罰を取り消さない。彼らが金のために正しい者売り、一足のくつのために貧しい者売ったからだ。7 彼らは弱い者の頭を地のちりに踏みつけ、貧しい者の道を曲げ、父と子が同じ女のところに通って、わたしの聖なる名を汚している。

これはどんな意味でしょうか? 金になることなら罪のない人でも罪のある者とし、靴一足で貧しいものの人権を踏みにじり、たくさん持っているものが貧しいものの物をうばい、謙遜な者を迫害し、父と子が同じ女と関係を持つなど道徳と倫理まで乱れていることをばらしています。もともと抵当に入れる服は日が暮れる前までは返すようにと命じられていました。(出エジプト22:26-27,申24:12-13)なぜなら、昼間は服として使われますが、夜は毛布として使ったのでそのように命じられたのです。しかし、これを無視して貧しい人たちが寒い中で凍(こご)えて死んでも返さなかったのです。貧しいものの人権を踏みつけたのです。6章4節以下には彼らの富と贅沢について記録しています。アモスが預言者として召された当時は貧富の差が激しく、社会正義が崩れ、道徳と倫理がなくなって人々の行為はなんの規定もなく、ただお金を持っているものだけが正義であり、法だと思われる無法の時代となってしまったのです。(アグルの祈り:)

<宗教的状況>

彼らのもっとも大きい問題とは経済的に豊かで、安定した故(ゆえ)に神様を頼らなくなったことです。自分たちの満足のために目に見える偶像を建て始め、さらにほかの偶像の神々をも持ってきます。もはや自分たちが信じる神を自分が決め、自分たちが信じる神々がまことの神のように偶像崇拝が激しくなっていました。神様にも定期的に礼拝も捧げましたが、これらのすべてはただいくつかの中での神に仕える儀式に過ぎませんでした。宗教儀式は残っていましたが、それは形だけの儀式に過ぎなかったし、神様のための信仰による仕えではなく、自己満足のための奉仕と礼拝に転落してしまいました。信仰が人々の生きている現場に何の影響も変化も意味も与える事ができませんでした。神様を信じると言いながら、我々の生き方や行動に我々の信仰が表されないならその信仰には問題がないはずがありません。

まとめると、アモスが預言者として召された当時も、神様を信じる信仰も墮落し、信仰生活も腐敗していた時代だったのが分かります。そういうわけで、神様はアモスを通して5章21切以下でこのように仰せられました。

“21わたしはあなたがたの祭りを憎み、退ける。あなたがたのきよめの集会のときのかおりも、わたしは、かぎたくない。22たとい、あなたがたが全焼のいけにえや、穀物の捧げ物をわたしにささげても、わたしはこれらをよろこばない。あなたがたの越えた家畜の若いいけにえにも、目もくれない。23あなたがたの歌の騒ぎを、わたしから遠ざけよ。わたしはあなたがたの琴の音を聞きたくない。24公義を水のように、正義をいつも水の流れる川のように、流れさせよ。”

<今日の本文>

このような基本的理解をもとに今日の本文について調べてみましょう アモス 5章21切で“わたしはあなたがたの祭りを憎み、退ける。あなたがたのきよめの集会のときのかおりも、わたしは、かぎたくない…”と言われました。神様はなかみのない形だけや心のない儀式を喜びません。神様の願われるのは善を行い、公儀を行う事であって、形だけの礼拝を守る事ではありませんでした。22節では“たとい、あなたがたが全焼のいけにえや、穀物の捧げ物をわたしにささげても、わたしはこれらをよろこばない”と言われました。全焼のいけにえは言葉のとおり、動物を完全に燃やしてその香りでささげる、穀物の

捧げ物は穀物をいけにえとしてささげることですが、ここで言われる‘全焼のいけにえや、穀物の捧げ物’は神様にささげるすべてのいけにえを意味します。なのに、神様はこれらのこともすべてよころばないと言われているのです。ようするに、神様の愛を實踐しないながらこれらのことはすべて虚しいからです。

23節では“あなたがたの歌の騒ぎを、わたしから遠ざけよ。わたしはあなたがたの琴の音を聞きたくない。”ソロモンの聖殿建築以降、いけにえの捧げ物とともに賛美隊の賛美は神様にささげる一部となりました。いろんな楽器も使われました。なのに神様はこのような賛美も受け取らないと言われました。神様の愛と公儀を行わない形だけの賛美と礼拝を神様は望んでおられないと言う意味です。

ヨーロッパを旅行したことのある方々は見られたと思いますが、中世時代のカトリック教会はとっても美しく雄壮でした。いまでもその中世の建築物がたくさん残っていてそれを表しています。ドイツのケルン教会堂は650年間建てた建物だそうです。イタリアのローマには700年間かかった教会堂もあるのだそうです。神様にささげると言われながら建てられたこの教会堂らはどれだけ美しく雄壮でしょうか？一度想像してみてください。美しいスタンドグラス、すばらしい彫刻象、聖歌隊の合唱、聖職者の聖い礼服など、人々の想像を超えるほど美しいと思います。

しかし、今日アモス書を通して我々がもう一度考えてみるべきことは、神様はこのような外見を喜ばれたのか？です。中世時代には男性も、女性もない中性の独特な声を作るために悩んだ末、変な聖歌隊を作りました。男性でありながら、男性の声でもなく、女性の声でもない15-18歳の声変わり以前の男の子達を集めさせて彼らを聖歌隊に使った事がありました。男性でありながら男性の声でもなく、かといって女性の声でもない独特な声を寄せ集めたと言って神様は喜んでくださったのでしょうか？

アモス書を含む様々な預言書を通して我々が誤解してはならない事は、だからといっていつも否定的で、批判的なクリスチャンになれという意味では決してないことを覚えましょう。ですから、教会のすべての形式的な礼式、賛美、礼拝などすべて否定し、批判してはいけません。このアモス書をとおして我々は見分けるべき事は今の時代も正しい信仰の分別力を持たなければならない事です。教会のすべての礼式がいらぬという意味ではありません。聖餐式と洗礼、そして御言葉と祈りと賛美、礼拝もすべて大切です。神様が預言者たちをとおして我々にも語ってくださる事は何ですか？奉仕と礼拝においてあなたの真心が、あなたの愛が込められているのか、信仰と心は神様から離れていながら自己満足のために形式だけもっているのではないのかそれ確かめる事です。謙遜に神様を愛し、人々を自分のように愛し、神様の愛によって仕え、犠牲を払ってささげることこれが真の礼拝と奉仕の核心である事を覚えなければなりません。

<アモス書をとおして神様が願われる事>

神様がこのアモス書を通してその時代の人々に、そしてこんにち我々に望んでおられることは何でしょうか？

まことに神様が喜ばれる事は24節です“公義を水のように、正義をいつも水の流れる川のように、流れさせよ。”これは言い換えると、“公義が水のように流れるようにさせ、正義がいつも乾かない川のようにながれさせよ”という意味です。

どんなにいけにえをささげるのしても神様の義を行おうとする真実さがなければ、それは受け取らない、ただわたしが願う事は公義をおこなうことであるのだというアモスのメッセージは我々にも光として投げかけてくださっています。

すべての時代におけるクリスチャンはその時代に対する責任があります。我々はこの社会に対する責任があります。

今日日本社会はどんな社会ですか？正義が行われていますか？

正義の神様を信じている我々が果たして教会だけではなく、この世と社会においても光と塩の役割を果たしているのでしょうか？

マタイの福音書5:13-16でイエス様は我々にこの世から離れている修道院のようなところで、祈禱院のようなところで祈りながら生きると言わないで、この世において光と塩として生きなさいと言われました。光と塩はどんな役割をするのかみなさんはよくご存知のはずです。

「主はあなたに告げられた。人よ。何が良いことなのか。主は何をあなたに求めておられるのか。それは、ただ公義を行ない、誠実を愛し、へりくだってあなたの神とともに歩むことではないか。(ミカ書6章8節(Micah))」

<塩の役割と使命 >

「あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。(マタイ6:13)」

みなさん！よく考えてみてください。塩は隠れることにより味があらわされます。塩は溶けてそのかたちがなくなることによって本当の塩の味がでるし、くさらないようにするではありませんか。かりに塩が自分自身を続けて表したがるなら、その味は出るでしょうか。そしてくさらないようにすることができるでしょうか。イエス様は救済をするとき、右の手がやることを左手が知らないようにしなさいとおっしゃいました。これがまさに塩の役割ではありませんか。しかし私たちにこれは決してたやすいことではありません。もしかすると、この世で一番難しいことの一つかもしれません。

パリサイ人たちがイエス様に叱られた理由もこれではないでしょうか。パリサイ人たちは律法をだれよりも熱心に守ろうとしました。その結果彼らは本当に律法にふさわしい者になりました。だれよりも熱心に祈り、だれよりも献金の生活も熱心でした。

しかしいざ聖書のいう人になった時彼らは塩のように自分自身を隠さなければなりません。そうしたならば、彼らの生活は味がついていてこの世はパリサイ人達を通して祝福を受けたと信じます。

しかし、彼らはそうしませんでした。彼らは自分たちのやっていることを人々に表したがりました。自慢しがりました。それで町の真ん中で祈り、祈っているふりをするためにわざとみずぼらしくしました。結局パリサイ人たちは人に見せるためにはたらく偽善者になってしまい、イエス様から”わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人”といわれるほどのろわれた者になってしまいました。

愛する聖徒のみなさん！信仰のリーダー、霊的指導者は塩のような者になるべきだと思います。初代教会には塩のような霊的な指導者たちが大勢いました。代表的な人が使徒の働きにでているバルナバのような人です。彼はまずしい人たちのために自分の財産をささげました。しかし自分がやったとあらわすのがいやだったので、しとたちのところにこっそりとおいたと聖書は記されています。ところが、みなさん。神の御言葉通りにしたがって生きることより私にはもっとむずかしいことがあります。それは神様の御言葉とおりに生きていてそれでしばらく成功していたとき、それを人々に表し、ほめられたがったり、それにふさわしい賞を受けたがるその心を打ち勝つことです。

そのような衝動を打ち勝つことができなければ、それで、自分の成功を表し始めると、食べ物の味がくさくなるのと同じように、我々も味がかわったクリスチャンになってしまうと思います。

そのような心がみなさんにも生じたときにはこのルカの福音書 17:9 節の御言葉によって自分自身を治められますようにおすすめします。“しもべが言いつけられたことをしたからといって、そのしもべに感謝するでしょうか。”この御言葉を深くさぐってみれば、自分がやったすばらしい業を人々が認めてくれなくてもかまわなくなります。つまり塩のような人になるのです。

すばらしい信仰の人は塩のような人です。神様の御言葉とおりにしたがってすばらしく実を結びながらでも、人々にそれをあらわせず、むしろ隠しながら、神様だけが知ってくだされば、それで十分だと言える人こそこの世を祝福させるまことの信仰の指導者になれると信じます。

<光の役割と使命>

「あなたがたは、世界の光です。山の上に ある町は隠れる事ができません。(マタイ6:14)」

しかしながらみなさん！光の役割はさきほど申したのとがちがいます。塩は隠されるときこそ自分の役を果たすことになりませんが、光は隠してはいけません。かえてあらわさなければなりません。そういうわけで、イエス様は「あかりをつけてそれを灯の下に置くものはいません。」と言われたのです。

私たちの問題は隠すべきの時はしきりにそれはあらわしたがりです。しかしぎ表さなければいけないときには、隠そうとします。右の手がやったことを左の手さえも知らないように隠すのが塩の役割であるならば、この世を生きながら自分がクリスチャンであることを表すことは光の役割です。しかし、私たちは自分がクリスチャンであることを堂々と人々に言い表せない場合がしばしばあります。

自分がイエスを信じていることをこの世に表すこと、これがまさに光の役割であり、使命なのです。なのになぜ、多くの人々は特にクリスチャンたちは自分の存在をかくしたがっていますか。いろいろな理由の中一番共通の理由の一つは自分がクリスチャンであることが世に知られるのに負担を感じているからです。自分がクリスチャンであることがまわりに知らされると生活は不自由になり、ほかの人たちに変な宗教にはいつてしまったような目で見られるのがこわいからです。

しかしみなさん！神様が一番悲しまれることではないでしょうか。自分の子供が親をはじかしいと思って、人々に親を隠そうとしていることをみた親の心はどうなると思いますか。神様も同じく神様の子供たちが自分が神様の子供であることを堂々とあらわせず、むしろ隠そうとすることこそ神様を苦しませ、悲しませることではないでしょうか。それでイエス様もあなたがたが世の人々のまえでわたしを知らないとする最後の日に神様のみまえで私もあなたがたを知らないと言われたのです。

この世をみてください。

今日はゲイ(同姓恋愛者)たちでさえも coming out という日を決めて年に一回自分達はけっしてはずかしい存在ではないことを堂々と表すために町に出てくるそうです。明らかな事実は私たちがクリスチャンであることを表しながら、それにふさわしく生活しようとするとき私たちは自分も知らないうちに神の恵みをさらに経験し、人々に励ましと力を与える者になっていくと信じます。

まことの聖徒、クリスチャンの生き方はだれにでも、隠さない者になります。裏がありません。そして全部表して生きる者です。それが光のような者になることです。いつもかくし、嘘つきで、二重的で、正直でない人は光のような者として生きる事ができません。それは教会の中でも、家でも、社会の中でもこのようなクリスチャンの生き方は変わりありません。不義で、人をたまし、偽善が満ちあふれるこの暗い時代に、だからこそ私たちは堂々と正義と愛の神を信じるクリスチャンであることをあらわし、この世の人々より正直でたたく、純潔と愛をもって生活していくべきではないでしょうか。その時、私たちはさらに神の霊的祝福を頂き、味わえると思えます。共に塩のようなクリスチャン、光のようなクリスチャンになりましょう。

<まとめ>

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！回りからではなく、他の人々に願うのではなく、まず自分から変わって行きましょう。イエスキリストを信じているクリスチャンが世の人々と変わりなく墮落して行くと、その時代も必ず墮落してました。しかし、その時代のクリスチャンたちが、この世の臭くなっている暗闇の所にキリストの愛と真理を持って照らして行った時代はかならずその社会も明るくなり、聖書的に改革され健全な社会に変わって行きました。

私たちがまず正義と公義を愛する神様を信じ、愛するクリスチャンとしてこの世の偽りと不義と妥協しないで、いつも神と家族やすべての人々の前でも偽りなく、隠すことのない生き方で生きるなら、この世もますます明るく変えられていくと信じます。

神を信じるクリスチャンたちは神の光のこどもたちの存在です。この社会と世界の暗いところを防ぐ塩の役割と使命がクリスチャンたちに与えられています。暗いところにキリストの光を照らし、不義のところを防ぐ神の塩なり神の正義と愛と平和の道具として用いられる我らとなりますようにこれからも神の正義と愛と平和の道具としてさらに大いに用いられるみなさんと我らのクリスチャンプレイズチャーチの全神の家族となりますように主イエスキリストの御名によって祝福し、祈ります。アーメン！